
風魔伝

洸淋寺 凧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風魔伝

【Nコード】

N2909D

【作者名】

洸淋寺 凧

【あらすじ】

ここは生き物が魔族と人間族の族、その他動物達に別れる世界。主人公フウゴと相方のハルパスは旅を続けている。なんのために？理由は分からない。ただ旅をしているのだ。それが魔族と人間族を繋ぐ時のルールだから……。

±説明書（必読！） ±（前書き）

これは風魔伝の用語などの説明書です。

±説明書（必読！）±

±説明書±

±主人公±

風邪<フウゴ>：族に人間族。風魔師である。

±相方±

ハルパス：族に魔族。風魔である。

±用語±

人間族：人間

魔族：人間とは違い、不思議な力を持つ。魔族の中にも種類が有り、不思議な力の種類によって魔族の種類も変わる。魔族は人間には直接見えない。

風魔<ふうま>：風を司る魔族。

雷魔<らいま>：雷を司る魔雷。

炎魔<えんま>：炎を司る魔炎。

水魔<すいま>：水を司る魔族。

魔導師<まどうし>：魔族とね契約を結んだ者のことを言う。分類の仕方は契約を結んだ魔族によって変わり、契約を結んだ魔族の力によって呼び方が変わる。

断裏の契約<だんりのけいやく>：魔族との契約の名。

デビドル：魔族の入るぬいぐるみ。契約を結んだ魔族は普段、これに入り主の魔導師と共に生活をする。デビドルにはいろいろな種類があり、ただの動物の形をしたデビドルから乗り物になるデビドルまで八百万！

±説明書（必読！） ±（後書き）

この小説は短編の連載です！プロローグを除いた作品はほとんど話
しが一つの話しで終わります。繋がっていません。つまり簡潔する
わけです。プロローグを読んだら後は適当に話しを選んでいいです。
では^^^；

プロローグ

「君は誰？」

「僕？僕は……」

今僕の目の前には目には見えないしゃべる何かがいる。

「僕は風邪って言うんだよ！」

「フウゴかぁ！いい名前だね！」

「君、名前がないの？」

「うん……」

「そうだな……エリザベスなんてのはどう？」

「いや、僕は男だよ？」

「ハルパス！ハルパスなんてのはどうだい？」

「お兄ちゃん！？」

「ハルパス、なんかいい響きだね」

「君は魔族だね？」

「そうだよ！」

「フウゴと……断裏の契約を結んでやってくれないか？」

……それがオレとハルパスの出会い……。

あれから五年は確実に経っている。

「フウゴ……お腹減った……」朱いプチドラゴンのデビドルに入ったハルパスが頭の周りを飛び回る。

「んもう！邪魔！」オレはハルパスを叩く。

「お、獲物見つけ！」

「でかしたハルパス！」そこには一匹の野兎。悪いが食料となって貰おう。

「いけ、ハルパス！」

「りょーかい！」

周りの空気に緊張が加わる。ハルパスの力だ。

野兎の動きが一瞬止まる。ハルパスの殺気を感じたようだ。力強く地面を蹴る。追尾開始だ！

「ハルパス！バイクのデビドルに乗り換えて！」

「いや、このままで大丈夫！」

「はいはい」

朱いプチドラゴンがさらに紅く染まる。野兎の血だ。

「まったく、洗濯しなきゃなんないじゃんか！」

「いいじゃん別に！それくらい！飢え死にするよりましでしょ？」

「非常食があるから平気です〜〜」

「フウゴがよくてもこっちはやなの！あんな砂！」

そう、オレが持つ非常食とはミネラルを沢山含んだ粘土。確かに美味しいと言ったら嘘になる。しかし飢え死にするよりはましだろう。

「ま、早く調理しようよ！」

「はいはい・・・」オレは腰のナイフポーチから一本ナイフを抜き取る。

「相変わらず凄い武器の量だね」

「ああ、オレはハルパスみたいに不思議な力を持つてないからね！自分の命は自分で守んなくちゃいけないしね」オレの武器はナイフだけでは無い。腰に二本のハンドライフルを二丁、背中には何発も同時に撃てる巨大なマシンガン。頭にかぶっている帽子には剃刀が三つ。着ているコートの内側には所狭しとメスがある。

「さ、出来た。ハルパス、食べるよ！」

「お、さすがはフウゴ！料理が上手いね！兎の肉と非常食のトッピングなのに美味しそう！」

「次の街に着けばレストランかなんかに行けるんだけどね〜」

「あー。この前止まった街が懐かしい」

「駄目だよハルパス！街に長くいすぎると力が鈍ってすぐに負けちゃうよ！それに断裏の契約の時だって魔族は街の定住を禁止する。」

「ってあつたじゃん」

「そうなんだよね〜」

「ま、次の街へ向かおうよ」

「そうだね！。んじゃご馳走さま〜」

「はいはい、じゃ、行こうか」オレは満腹のお腹をさすりながら立ち上がる。

酷

「ねえフウゴ」

「何か？」

「この前戦った炎魔の野郎にさ、」

「うん」

「今付けられてるよ」

「え、ええ〜〜〜〜！？」

「御明答！よく気付きましたね」草むらから長身の男と兎。無論、兎の方が炎魔だ。こいつらとは以前完敗している。しかしまさか付けられていたとは。

「いつから付けていたんですか？」

「君達に勝った時からさ」

「目的は、何ですか？」

「そんなの簡単さ！僕は君の魔族、たしかハルパス君とか言ってたっけ？に興味があるんだ！あの時戦った時はまだ未熟だったが、今なら楽しめそうだ。コロネも同じ意見だ！」

コロネと呼ばれた兎（炎魔）はハルパス同様のデビドル、プチドラゴンのデビドルに乗り換える。

「勝負をしようじゃないか！同じプチドラゴンのデビドル同士で！これなら公平だろ？」

「オレは構いませんよ。最近誰にも会わずに退屈していた所ですから。ハルパスは？」

「否、絶対やだね。公平とかいいながらどうせこっちを利用するつもりなんでしょ？」

「お、ハルパス君は少し頭が切れるようだね」

「やっぱり」

「ハルパス、どういう事？」

「断裏の契約を結んだ魔族、魔導師はね、旅の時に他の断裏の契約

を結んだ魔族、魔導師とパーティーを組む事を許されているんだよ！はい、御次はそちらがどうぞ」ハルパスが言くとバトンを渡された長身の男が言う。

「そして魔族のコンボがあつてね！炎魔のコンボで一番使えるのが風魔なんだ！風魔がエチユード（風魔の使う技の中で最もポピュラーな技）に炎魔がファイ（炎魔の使う技の中で最もポピュラーな技）をぶつける。すると爆発が起きて相手に莫大なダメージを与える。それに敵が複数の場合は敵全体にダメージを与えられる」

「つまりオレ達とパーティーを組みたいんですか？」

「いや、僕達はそれを戦闘で使おうとしていた。いや、まだするつもりかな？」

「どういう意味？」

「つまりフウゴまでダメージを受けちゃうって事！」

「なんだって！？人間族が魔族を故意に攻撃するのは許されているが魔族が故意に人間族を攻撃するのは禁止されているじゃないか」

「そう、しかし僕はそれを故意に見せずに攻撃出来る」

「何ですか？」

「コンボが自然に起きたように見せればいい。今君達だって僕が言わなきゃ知らなかっただろ？」

「フウゴは知らなかったけどこっちは知ってたよ」

「だが確信は無い」

「うつ・・・」

「だろ？ま、言っちゃったからには確実に殺さなきゃね。コロネ、行くよ」コロネが空を切る。そしてハルパスが朱く染まって行く。

「ハルパス、大丈夫？」

「大丈夫、フウゴも気を付けて！あいつら^{まじ}本気で殺すつもりだよ！実際コロネは殺気だっている。

「エチユード！」ファイを覚悟でオレはハルパスに指示を出す。

「ファイ！」やはりそう来た。目の前で爆発が起きる。

「フウゴー！」ハルパスがオレに寄って来る。

「聞いてくれ！オレに考えがあるんだ……」

「よくここまで来て生きていられたね、感心するよ。立てるかい？」

「余計なお世話です」とは言った物の体はもうボロボロ。次で作戦を成功させなければ本当に死んでしまう。

「ハルパス、あれ行くよ！」

「え！？あれ行っちゃうの？」

『あれ』とは、オレ達が今まで旅を続けて中で編み出した禁断の技。下手をしたらハルパスの命まで危うくなる。

「何が来たって僕達は負けませんよ」

「の構え！」

ハルパスが前ならえの構えをする。

「成る程、無拍子か」

「残念。さ、ハルパス！死ぬなよ」

「りょーかい」

「コロネ、構えろ。来るぞ」

「3、」

「2、」

「1、」

「ジ、エンド」

途端にハルパスのが消える。朱く染まったプチドラゴンのデビドルがすくと落ちる。

「デビドルから抜けたって魔族同士ならお互いが見えるのを君は忘れたのかい？」

「いいえ。覚えていますよ」

「なら何故？」

「妖音、ハルパスが……いない」
あやね

「ほう、妖音さんというのですか。ま、ハルパスが見えないのは当たり前でしょうね何せ現実にはいないんですから」
リアル

「なら魔導師の貴方から潰させて頂きます。行け！」

「でも人間族を攻撃したら・・・」

「躊躇するな！さっきまでガンガン攻撃してただろ！」

「わ、分かったよ妖音」

コロネがオレに向かって炎を吐く。大丈夫、心配はいらない。

ボワという音がした。オレの目の前で炎が炎上。もちろんダメー
ジは受けない。

「ど、どういう事だ？何故生きてる！？」

「それは貴方が・・・愚か者だから」

「僕が・・・愚か者だと？」

「ああ。今だって・・・」

「妖音~~~~」

「どうした！？コロネ？んなつ！？」

「ね、言った通りでしょ」

デビドルに入ったコロネは宙でもがいている。

「ハルパス、やっちゃいな」

「りょーかい！フウゴ！」

「エチュード」

「あいつ大丈夫かな？」

「うーん。あの距離でエチュードを喰らったからどうかな？」

ま、妖音さんがどうにかするさ」

「にしてもフウゴの判断は凄かったよ」

「ありがとっ！ま、オレは倒さなくちゃいけない奴がいるからな。

あれくらいで失敗してちゃ奴には勝てない」

「ソーヤだね？」

「ああ」

「さ、次の町に着くよ」

「りょーかい！ついたら新しいデビドル買ってね。気持ち悪くてし
かたがない」

「はいはい」

そしてオレ達は次の町へ向かって歩を進める。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2909d/>

風魔伝

2010年10月17日02時29分発行